

令和5年度
静岡県幼児教育の理解・発展推進事業
都道府県協議会



静岡県幼児教育推進マスコットキャラクター
『わっ!ぴよん』

静岡県教育委員会

目 次

共通協議主題	1
--------------	---

「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児
教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

松崎町立松崎幼稚園

協議主題 2	12
--------------	----

指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について

静岡大学教育学部附属幼稚園

資料

・静岡県幼児教育センター 就学前教育情報 HPのご案内

令和5年度静岡県幼児教育の理解・発展推進事業都道府県協議会

静岡県幼児教育センター

1 目的

幼児教育の内容、園の運営や管理、保育技術等に関して、協議主題に基づく講義や研究協議等を行うことにより、幼児教育に携わる教員及び職員の資質向上を図る。

2 参加対象者

- (1) 各市町（指定都市を除く）の公立幼稚園及び公立認定こども園（幼稚園型・幼保連携型）の指導的立場にある教員等 各園1人以上
- (2) 上記以外の県内国公私立幼稚園、公私立保育所、公私立認定こども園及び県立特別支援学校幼稚部の指導的立場にある教員及び保育士等 希望者
- (3) 指定都市を含む市町の公立小中学校教員等 希望者
- (4) 指定都市を含む市町幼児教育主管課担当者及び教育委員会学校教育主管課指導主事等 希望者

3 主催

静岡県教育委員会 文部科学省

4 協議主題及び協議の視点

これまでの本事業の成果や課題を踏まえ、文部科学省が示した協議主題（別添1「都道府県協議会協議主題（令和5年度）」）のうち、以下の2つの協議主題を視点に協議を行う。

- (1) 「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について
- (2) 指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について

5 日時及び会場

(1) 静西会場

令和5年8月23日（水） 午前10時から午後4時まで
静岡県総合教育センター 講堂他（掛川市富部456）

(2) 静東会場

令和5年8月24日（木） 午前10時から午後4時まで
三島市民文化会館 小ホール他（三島市一番町20-5）

6 日程及び内容

時刻	内容		会場
9:30~10:00	受付		
10:00 ~ 10:20	全体会 I	(1) 開会挨拶 静岡県幼児教育センター室長 (2) 趣旨及び日程説明 (3) 協議主題について	静西：講堂 静東：小ホール
10:20 ~ 11:20	実践発表 質疑応答	(1) 「共通協議主題」 松崎町立松崎幼稚園 (2) 「協議主題2」 静岡大学教育学部附属幼稚園	
11:20 ~ 11:50	指導講評	静岡県幼児教育センター	
11:50 ~ 11:55	諸連絡		
11:55 ~ 13:00	昼食・休憩		
13:00 ~ 14:15	分科会	分科会 A 分科会 B	参加者名簿参照
14:15 ~ 14:30	移動・休憩		
14:30 ~ 16:00	講演	演題 「幼小接続の在り方について －幼児期の遊びを通じた学びを小学校 教育へつなぐ－」 講師 名古屋学芸大学 教授 津金 美智子 氏	静西：講堂 静東：小ホール
16:00	閉会		

7 その他

(1) アンケートの依頼

研修会終了後、9月6日（水）までに、下記のQRコードを読み取るか、URLをク

リックし、アンケートに回答してください。御協力をお願いします。



<https://forms.gle/oCoGdwvzn9ahf5Xc7>

(2) 問合せ先

静岡県幼児教育センター (054-221-3287)

「幼児教育と小学校の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、
幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について



松崎町立松崎幼稚園

1 本園の実態

(1) 幼稚園の所在地 賀茂郡松崎町岩科北側 447 番地の 2

(2) 園児数及び職員構成

令和 5 年 5 月 1 日現在

	3 歳児	4 歳児	5 歳児	合計
学級数	1	1	1	3
園児数	8	10	9	27
職員数	1	1	1	6 園長 1 主任 1 副主任 1

(3) 本園及び地域の実態

ア 松崎町は 4 地区からなり、松崎、三浦地区は、駿河湾と接し、岩科、中川地区は山間部に位置する。四季折々の美しい自然に恵まれ、伊豆半島の成り立ちを伝える特徴的な地形が残る自然豊かで静かな地域である。

イ 本園のある岩科地区は、神社仏閣が多く存在し、伝統行事の継承を通して人々がつながる地区である。また、園と隣接して国指定の重要文化財「岩科重文学校」があり、伝統美を誇る名工入江長八の作品も保存されている。

ウ 本園は平成 29 年に町立幼稚園の統合に伴い公立幼稚園一園となり、町内の保育・教育施設は、公立幼稚園、私立保育園各一園と小学校、中学校、高等学校、特別支援学校分校各一校である。

エ 保護者は、園の教育に関心があり協力的である。また、地域の方々との温かな触れ合いの機会が多い。

2 研究の構想

< 共通協議主題 >

「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

【協議の視点】

- ① 幼児教育施設と小学校の先生方が、それぞれの保育・教育への理解を深め、架け橋期のカリキュラムを協働して作成するためには、どのようにしていけばよいか。
- ② 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）や参考資料（初版）等を踏まえ、子供の発達や学びの連続性を確保するため、各園や学校としてこれから何に取り組んでいく必要があるのか。

(1) 主題の受け止め

遊びを通して学ぶ幼児期の教育から、教科等の学習を中心とした小学校教育へと移行する中で子供の発達や学びの連続性を確保するためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」を手掛かりとし、幼稚園と小学校の教職員との対話を通して、保育や教育を相互理解し共通の視点を出し合うことが必要である。子供の成長を切れ

目なく支えるという観点から、幼小の円滑な接続につなげるとはどのようなことかを次のように捉えた。

ア 幼児期と児童期で子供の学びがつながるために、幼児教育と小学校教育の特徴や違いを理解することが大事である。そのうえで個々の多様性に配慮しながら、保育、教育の内容や方法を工夫していく。

イ 幼稚園、保育園の横のつながり、小学校の縦のつながりを意識しながら、継続的に交流できる計画を立案する。交流を通して育みたい資質・能力を共通理解し、互恵性のある交流活動を実践する。

ウ 本園の教育課題である「恵まれた自然環境の中で、自己を表出しながら、友達と感動を共有する心を育てる」保育を行う中で、五感を働かせながら不思議さや面白さ等を感じる感動体験を積み重ねることで満足感を味わい、豊かな感性や好奇心、探究心が生まれ、小学校以降の学習の基盤となる芽生えを培っていく。

(2) 研究の方法

ア 子供理解を中心にした連携の推進（町教委の取組）

(ア) 「子供を知る会」等の幼保小中連絡会を通して、子供理解を図りながら、教職員間の連携を強化する。

(イ) 賀茂地域幼児教育アドバイザー巡回訪問に教職員が参加することを通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」への理解を深める。

(ウ) 幼小連携研修会や幼小中一貫研修会を通して、幼小中の教職員で子供たちの姿について話すことから目指す子供像の共有につなげる。

イ 幼保（5歳児）の横のつながりや幼保小の縦のつながり（交流活動）

(ア) 私立保育園5歳児や小学校との交流を通し、横や縦のつながりを深め小学校入学の期待を共に育む。さらに互恵性のある交流活動を実施する。

(イ) 幼保小の教職員間で交流について、事前の話し合い⇒準備⇒交流活動⇒振り返りの場を設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を手掛かりにして、教育と保育について相互理解を深める。

ウ 地域の自然等を活用した遊びを通した学びの充実

(ア) 身近な地域に興味や関心をもち主体的に関わる体験を通して好奇心や探究心を育む保育を工夫し、小学校以降の学習の基盤となる芽生えを培う。

(イ) 環境を通した保育の中で、一人一人が主体的に活動する姿や心の動きを読み取り、どのような資質・能力が育まれているか職員間で共通理解するなど、園内研修を充実させることにより、幼小接続を意図した保育の質の向上を目指す。

3 研究の実践

(1) 子供理解を中心にした連携の推進（町教委の取組）

ア 子供を知る会

松崎町では、平成 30 年度より、幼小中の子供たちの様子を共有し、関係機関が連携した支援を行うため、「子供を知る会」を毎月開催している。様々な立場の参加者が、それぞれの専門的な視点で対応を検討しながら継続的に支援を積み重ねてきた。

会の中で、保護者が長子の入学で小学校の様子を知りたいという願いをもっていることが話題となった。「保護者が小学校の授業がどんな様子なのか分からないことが不安なのではないか」また、「園でも事前にやることを伝え、見通しをもたせることで落ち着いて活動できる」などの意見が出された。そこで、小学校は新入生説明会の機会を利用し、全ての保護者を対象に授業参観を実施した。参加した保護者からは、「担任や支援員が子供に寄り添い授業が進められていた」といった感想が聞かれ、参観したことが安心につながった様子が見えられた。「子供を知る会」での話し合いから幼稚園と小学校が連携し、保護者への支援につながった。

本年度からは、保育園、高校、特別支援学校にも参加を依頼し、「先生大集合」と称し、全校種の教職員で町の子供に関わる活動へ広げている。また、ICT機器を活用した一大ネットワークの構築により、教職員間のつながりをさらに深めていきたい。

【子供を知る会参加者】
教育長
教育委員会事務局長
幼稚園長
小中学校養護教諭
スクールカウンセラー
スクールソーシャルワーカー
町保健師
特別支援学校教諭
指導主事

イ 賀茂地域幼児教育アドバイザーの活用

平成 29 年度より、賀茂地域 1 市 5 町で幼児教育アドバイザーを配置している。アドバイザーの主な活動に幼児教育施設と小学校への巡回訪問があり、その場を町の教職員の研修交流の場として活用した。「幼児期の終わりまでに育ってほしい



10 の姿」を手掛かりに、アドバイザーがどのように子供の姿を価値付けたのかを聞くことや子供の姿について参加者同士が話し合うことで、幼小接続について理解を深めた。

(ア) 小学校訪問

幼稚園、保育園から 5 歳児担任が 1 名ずつ参加し、1 年生の授業を参観した後、アドバイザーと 1 年担任の話し合いに参加した。

授業参観では、友達と楽しく音楽活動している子供の姿が、園で歌やダンスが好きだった姿と重なり、幼保の活動と小学校の学習がつながっていることを実感した。話し合いでは、アドバイザーのファシリテートにより、まず、1 年担任が入学後の対応で意識していることや子供たちのよさや可能性について話をした。

「友達と仲よく活動しています」「係の仕事を進んで行っているので任せています」などの言葉から、園生活で育まれた資質・能力が小学校でどう発揮されているかを知ることができた。また、苦手なことに抵抗があり活動しなくなる子

に対して、どのような支援をしていくかという共通の課題を取り上げ、互いの支援方法について意見交換をしたことは、よりよい関わりについて考える機会になった。さらに、アドバイザーの保育・教育に対する価値付けが入ることで、参加者が安心して話すことができ、話し合いが進むほど接続への理解が深まった。

(イ) 幼稚園訪問

午前中の5歳児保育参観、午後の事後研修に小学校の1年担任が参加した。

事後研修では、保育のねらいに即して、保育者と小学校教員が子供のあらわれを協議することを通して、互いの立場の考え方や子供の見方を知ることができた。協議後は、アドバイザーによる講義が行われた。アドバイザーによる保育の価値付けをもとに、遊びを通した学びについてさらに追求していった。保育参観で、活動に対する子供の意欲に注目していた小学校教員は、講義を通して、その意欲的な姿の中に試行錯誤や粘り強さといった資質・能力が育成されることに気付くことができた。参加者は、具体的な子供の姿から園で育まれている資質・能力が小学校教育の基礎となっていることを知り、幼小接続に対する理解を深めた。

ウ 幼小連携研修会、幼小中一貫研修会

幼稚園の保育を小学校の校長や教員が参観し、研修協議では、子供の姿について語り合い、遊びを通して育まれる資質・能力、子供への適切な関わり方などを学んだ。また、幼小中一貫研修会では、小学校の授業を幼稚園・中学校教員が参観し、どのような資質・能力が育まれていたかについて語り合われた。5歳児から小1までの架け橋期の子供の姿だけでなく、乳幼児から児童・生徒に至るまでの発達を見通し、それぞれの発達の段階でどのような子供の姿を期待するのかについて理解を深めた。



(2) 幼保(5歳児)の横のつながりや幼保小の縦のつながり(交流活動)

町内にある幼稚園、保育園、小学校で、主に5歳児と小学校1年生の交流活動を平成20年頃から計画的に行っている。保育園との横のつながり、小学校との縦のつながりを深めることは子供たちにとって小学校入学への不安を軽減し、安心感を高めることにつながっている。

【令和4年度交流実績(コロナのため実施できなかったものは×)】

	幼稚園	保育園	小学校	障がい者就労支援施設
ふれあい交流① (5月)	○	○		○
ふれあい交流② (11月)	○	○		○
ふれあい交流③ (2月)	○	○		○
5歳児交流 (10月)	○	○		
小学校運動会練習見学 (10月)	○	×	○	
幼保小交流 (11月)	○	×	○	
体験入学 (1月)	○	○	○	
幼保小の交流の振り返り	○	○	○	
交流回数	8	6	4	3

ア 5歳児交流（10月）

幼稚園・保育園それぞれの運動会が終了後、「運動会ごっこ（体操・かけっこ・リレー・ダンス・鼓笛演奏）」を行った。関わりが多くもてるように意図的にチームを編成したリレーでは、走る順番を子供たちに任せ、話し合いで決めるようにした。皆で考えを出し合い、友達の意見を聞いたり、自分の思いを話したり、譲り合ったりしながら、話し合いをした。「ドキドキしたけど、自分から走りたい番号が言えてよかった」「リレーの順番をみんなで決めて勝てたから相談がうまくいった」「幼稚園の運動会より人数が増えたから、リレーも楽しかった」などの感想が聞かれ、それぞれのチームを応援し、皆でバトンをつなげたことに達成感を感じ、お互いの距離が近くなったように感じられた。ふれあい交流では、互いに話をする場が少なかったため、今回は意図的な関わりの方を設けた。一緒に遊んだ体験が心を通わせ、小学生になったときに、親しみをもって関わられるのではないかと感じた。



その後、幼稚園はダンス、保育園は鼓笛演奏を披露し、「すごい」「かっこいい」「やってみてほしいなあ」など、互いのよさを認め合う姿が見られた。また、友達の名前を覚え「〇〇君と遊びたい」「小学校へ一緒に行くんだね」の声も聞かれた。

後日、保育園の鼓笛演奏に刺激を受けた子供たちは、園で行われる発表会で大太鼓、小太鼓を取り入れ楽器演奏に挑戦した。大太鼓と小太鼓の音の違いや響きの違いを感じ、「大きな音だね」「保育園の鼓笛と同じだね」と満足感を味わっていた。

イ 幼保小交流（11月）

1年生と「ドロケイ」の運動遊びでは、逃げたり、捕まえられたりしながら体育館を力いっぱい走り楽しんでいた。ルールが守れなかったときには、1年生に優しく教えてもらい楽しく遊ぶためには決まりを守らないといけないことを改めて感じていた。



学校見学では、1年生の読書や道徳の場面を見せてもらい、「静かに本を読んでいるね」「手の挙げ方がきれいだった」と感想が聞かれた。校内見学では「小学校の水道は蛇口が高いね」と触り、幼稚園の水道との高さの違いを確認していた。

ウ 体験入学（1月）

緊張の表情が見られたが、優しく迎え入れてくれた1年生の顔に安心した様子が伺えた。国語、算数、音楽、生活科、図工、体育の授業の一コマをクイズ形式で絵に描いたり、動作で示して紹介してくれたりしたので幼稚園児には大変わかりやすく、進んで手を挙げて参加する姿が見られた。「国語って難しいと思っていたけど、楽しそうだった」「体育でやってた縄跳びがすごかったね」「鉄琴って初めて見た」「挑戦してみたいな」と期待を大きく膨らめていた。



ドッジボールでは「1年生が『投げていいよ』とボールを渡してくれた」

「当てられたけど、外野に出てボールを投げられてよかった」など、優しい気持ちに触れ、小学生とのドッジボールで活躍ができ、嬉しかった気持ちも伝わった。学校見学のペアが顔見知りの1年生だったので、安心して手を繋ぎ案内をしてもらった。「ここが1年生の部屋なんだな」「1年生になったらこの机や椅子を使うんだと思った」など、具体的にイメージを膨らませていた。帰りにグラウンドで見送ってくれた1年生が縄跳びをしながら「幼稚園の時には〇〇回跳べた。今は〇〇回跳べるよ」と幼稚園での達成感、満足感が小学校でもつながり生かされていることが小学生の言葉から実感できた。

幼稚園に帰り、1年生がドッジボールで、チーム分けやタイマーで終了時間を知らせるなどの様子に、年長児も刺激を受け、「ドッジボールをやる人!」「人数が足りないからこっちのチームに入ってください」「終わりです。並んでください」など数の確認をしたり、ルールを守って遊んだりする姿が見られた。

エ 教職員の振り返り

幼保の5歳児担任が小学校1年生担任と、交流時のあらわれについて振り返った。交流時のあらわれと合わせ、日頃の保育で意識していることを意見交換した。5歳児の交流が小学校への接続を意識して行われていることから、互いの園でどんな資質・能力が育まれているか、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に照らし合わせてまとめ、小学校とも内容を共有した。小学校からは「幼児教育の視点が見え、小学校側の視点や考え方の広がりにつながった」「接続の工夫を幼小で話し合う機会があるとよい」といった意見が聞かれた。今までは交流の打ち合せや反省が中心だったが、令和4年度は交流を通してどのような力が付いたのか、5歳児に育まれている資質・能力は何かといった学びのつながりに視点をおいた内容の話し合いに転換した。令和5年度からは交流の前に、目的を共有するための話し合いの場を設定することを確認した。



(3) 地域の自然等を活用した遊びを通した学びの充実

幼稚園教育要領には、小学校教育との接続に当たっての留意事項として、「幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにする」とあり、それが「小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながる」と記載されている。そこで、研修テーマを「友達と一緒に遊びを楽しむ子～人や自然との関わりを通して～」とし、地域の人や自然等を環境構成に取り入れることで、子供は親しみをもって自ら積極的に環境に関わり、試行錯誤しながら自分のしたいことを広げて、それが創造的な思考や主体的な生活態度の基礎となり、小学校以降の生活や学習の基盤になると考えた。

実践例1 【いきものランドを作ろう】

4～5月中旬。園庭でだんご虫や蝶々、テントウム虫を見つけたり、園の前や周辺の堰や田んぼなどでおたまじゃくしやカエル、コオイ虫などを捕えたりした。図鑑や自然に関する

る絵本などを目に付き易い場所に置くと、わからない虫や生き物の名前を、友達と一緒に調べる姿が見られるようになった。生き物が苦手な子供もいたが、友達が捕ったり触れたりする様子を見たり、一緒にわからないことを調べたりする中で、徐々に関心を広げ触れたり、捕ったりする姿が増えた。また、飼育する生き物が増えていく中で、どのように世話をしたらよいのか話し合った。「餌が無いと死んじゃうよね」「水が汚くなるとダメだよね」など、これまでの経験から餌くれや水替えの必要性を感じ、世話をするようになった。



6月上旬。多くの子供が生き物への興味関心を広げ、「生き物の劇をしようか」「ペーパーサートみたいのを作るといいんじゃない」「捕えた生き物を見せたいな」「粘土とかペットボトルとかで作った生き物見せたい」など、様々な考えを出し合った。そして、保育者が「それじゃあ、どうしようか？」と尋ねると「いろいろな生き物がいる所になるね」「ここを“いきものランド”にしない？」「みんなで作ろう！」「それいいね！」と、意見がまとまり“いきものランド”作りが始まった。子供の発想やつぶやきを生かしながら、友達と一緒に必要な材料を考えたり、探したりして製作に取り組んだ。「ザリガニは爪が2本、足が8本ある」「足の先にも爪がある」と、じっくり観察して気付いたことを紙粘土や廃材を使って表現していた。自分達で捕った生き物は「これ(飼育ケース)に名前を付けると何がわかるよね」「私、書くよ」「僕も書く」とあいうえお表や図鑑を見ながら生き物の名前を書いていった。



作った物が形になってくると、「お客さんを呼びたいね」「お金とかチケットとかあるといいね」「じゃあ係りも決めよう」などイメージを膨らめ、遊びに必要な物を作った。異年齢の友達や保護者を招待したいという目的をもち始めた。【チケット係】【生き物の場所を案内】【作った生き物の場所を案内】

【お土産係】の4つの係りを決めて、“いきものランド”作りに取り組んだ。チケット作りでは「“と



ってどうかくの？」「こうやって書くんだよ」など、友達と教え合う姿があった。「僕は4枚作ったよ」「私は3枚作ったよ」「Aちゃんが3枚作ったから、7枚になったね」と、文字を書いた枚数を数えたりしながら準備をした。また、作った生き物を「ザリガニは草とか石の所に隠れてるね」「カタツムリは葉っぱの所かな？」「クワガタは木にいるよね」など、地域に出かけて発見したことを友達と伝え合いながら生き物が住んでいそうな場所に並べていった。“いきものランド”が完成し、子供たちは大満足だった。

《考察》

地域の自然を生かした活動を通して好奇心をもち、周りの人や環境に主体的に関わる姿が多く見られた。また、研修において振り返りを行うことで、活動を通して子供たちが何を学んでいるのか、どのような資質・能力が育まれているのか、職員が共通理解すること

で、一人一人に合った援助の工夫につながったと思われる。子供の興味や関心を見取り、気付きを支えていくことで、安心して考えを出し合い、学びの基礎を培っていくのではないかと考える。

《 “いきものランド” の活動を通して育まれた資質・能力 》



【健康な心と体】
心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動する

【自立心】
諦めずに最後までやり遂げようと意欲的に取り組む

【協同性】
友達と共通の目的をもち、協力しながら遊ぶ充実感を味わう

【道徳性・規範意識の芽生え】
友達と互いの思いを共感する
遊びのきまりを作ったり、守ったりする

【社会生活との関わり】
異年齢児や保護者を遊びに招き、相手の気持ちを考えて関わるようになる

【思考力の芽生え】
自分とは違った考えがあることを知り、試行錯誤しながら問題を解決しようとする

【言葉による伝え合い】
友達と互いの思いや感じたことを伝え合う

【豊かな感性と表現】
様々な材料の特徴や表現の仕方に気付き、感じたこと、考えたことを工夫して表現する

【数量や図形、標識や文字への関心・感覚】
文字や数字の必要感を感じ、興味や関心、感覚をもつようになる

【自然への関わり・生命尊重】
生き物の不思議さや生態に気付き、命の大切さを知る

実践例2 【松崎かるたで遊ぼう！】

1月お正月遊びの一つとして“松崎かるた”^{*}を出しておく、「これやってみたいな」と数名が興味を示し遊び始めた。松崎の各地区の名所が出てくるかるたに、「棚田に遠足に行ったよね」「どんど焼きやったね！」「なまこ壁だ！」「重文学校だ！」「ここに行ってみたいな」など、自分たちが行ったことのある場所や出来事に興味をもった様子が見られた。参観日に保護者と一緒にかるた取りを行った際、母親や地域の人が作った物があることを知り、松崎かるたの楽しさや面白さを感じた。

ある日、幼稚園の思い出話をしながらマフラー作りしていた2名の子供たちが、「棚田に行ったよねー」「海がきれいに見えたよね」「富士山が見えるときれいだよね」「船が小さく見えた」「ヤギもいたね」など、棚田遠足に行った時に見たり感じたりしたことを友達と伝え合っていた。

するとAが「棚田から見る海はキラキラしていてきれいだよ。富士山見えると嬉しいな」と、言葉をつなげて話していた。すると「いいね！何だかかるたの読むやつみたいだね」と気付き言葉遊びが始まった。



2人のやりとりを聞いていた数名が加わり、「今度は花畑に行った時のことにしよう」「いいね」「オレンジの花があったよね」「アフリカキンセンカ!」「金魚みたいな名前の花もあったね」「かかしもあったね」など、自分達の経験を思い出したり連想したりして言葉を伝え合っていた。Bが「A君が言っていたみたいにみんなのお話つなげると楽しいね」と言うと、「みんなの松崎かるたできそうだね」というCの声に「いいね」と賛同する声が続々と聞かれ、「さくら組“みんなの松崎かるた”を作ろうよ」とCが提案した。

園内研修の中で、“松崎かるた”のことについて話し合った。なぜ、子供たちが興味をもったのだろうか。子供たちの興味や関心に応じて思いを実現するために、今後どのような環境構成の工夫や援助が必要か、かるた遊びはどんな学びがあるのかなど多面的に捉えた。



行ったことのある場所や体験したことだから興味をもったのかな

子供のつづやきをつなげたことで、子供たちが自分のこととして感じたの

文字や数への興味が広がりそう

松崎かるたから、いろいろなことにつながり活動が広がっている

絵札を子供たちが出かけた時の写真にすると、気持ちの共有ができるかな

松崎のいい所を知ることができる。例えば、重要文化財や人物、名所など

絵札の場所に改めて行くと、違う気づきがあるのかな

<環境構成> 絵札と子供たちが実際に経験したことや共に散策した場所の写真を大きく掲示し、よりイメージがわくようにした。

① “さいの神(どんど焼き)”の写真をみると「田んぼにあったどんど焼きだ!」「団子を焼いて食べた」「食べると風邪をひかない」「神様が入ってるのかな」「お飾りを燃やして一緒に空に帰るのかな」「団子焼いたら、ご飯のにおいがした」「昔の行事だね」 **読**

み札⇒どんど焼き 神様(お飾り) 燃やして 空にかえす

② “鰻絵の入江長八 鶴の間”の写真をみると「壁一面に鶴の絵」「小さい鶴」「大きい鶴」「広がる」「きれい」「たくさんいた」「鶴が羽ばたく」

読み札⇒鶴の間 壁一面に 鶴が羽ばたく

<援助> 子供たちは感じたことや考えたことを次々話していたので、ホワイトボードに保育者が言葉を書き留めたり、思いに共感したり言葉を引き出すようにした。

字の読める子が読んでみると、「読み札みたいに、読みやすくなるといいな」「じゃあ、これはどう?」「これは?」と、試す中で読み札ができていった。話し合いの中で普段は自ら発言をしない子も、進んで自分なりの言葉を伝えようとする姿も見られた。言葉をつなげて表現することで、行った場所や経験を共有し、「次は、これ(絵札)の言葉考えたいな」

と、数日間かけて16種の読み札を考えた。読み札を作っていく中で、文字への興味関心が芽生え、「字を書いてみたい!」「読んでみたい!」という意欲につながり、友達や保育者に教えてもらったり、あいうえお表を見ながら書いたりする姿が見られるようになった。

自分たちで考えた読み札と写真の絵札で、“さくら組(5歳児)の松崎かるた”(大型かるた)ができた。みんなで考え、作り上げた喜びや満足感から、かるた取りの遊びに発展し、友達と誘い合い遊び始めた。個人戦やチーム戦で楽しみ、「何枚取れた?」「〇〇ちゃんががんばれ!」「一緒に数えよう!」と、数に関心をもったり、友達と力を合わせたりする姿が見られた。

※松崎かるた・・・地域の建造物や名所、行事などを取り入れたかるた。20年程前に松崎中学校の生徒が制作した。



《考察》

地域の自然や文化、伝統に触れる豊かな体験を通して、自分たちの“松崎かるた”を作りたいという共通の目的が生まれた。かるた遊びの中で、考えたことを相手に伝えながら工夫したり、協力してやり遂げたりするなど協同して活動することの大切さを学んだ。この遊びを通して育まれた協同性は小学校における学習の中で目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力し、様々な意見を交わしながら新しい考えを生み出し、学び合う姿につながっていくと思われる。

《 “松崎かるた” の活動を通して育まれた資質・能力 》



【健康な心と体】
目的に向かって見通しをもって遊びを進める

【自立心】
考えたり、工夫したりしながらかるた作りをし、繰り返し友達と遊ぶ

【協同性】
友達と共通の目的を見出し、工夫したり協力したりする

【道徳性・規範意識の芽生え】
友達と話し合っ規則を決めたり、守ったりして遊びを進める

【社会生活との関わり】
伝統的な遊びを友達と一緒に楽しむ
かるたに出てくる地域に出かけ、見たり聞いたりする

【思考力の芽生え】
友達の考えを知り、自分とは違った考えがあることに気づき、自分なりの考えをもったり、話し合ったりする

【自然への関わり・生命尊重】
四季折々の地域の自然や名所などに出かけ、発見したり、気付いたり、調べたりする

【数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚】
文字や数への関心を高め、必要感をもって遊びに取り入れる

【言葉による伝え合い】
互いに気付いたこと、考えたことを伝え合い、刺激し合う

【豊かな感性と表現】
体験を通し、感動したこと、心に残ったことを言葉や絵で表現する

4 研究の成果と今後の取組（○成果 ・ 今後の取組）

(1) 子供理解を中心にした連携の推進（町教委の取組）

- 子供を知る会では関係機関が子供への援助の工夫を多様に提案し合うことで、理解がさらに深まり指導につながった。また、小学校入学前に個の様子を共有して、子供が安心して小学校生活を送れる環境を整えることができた。
- 幼児期に遊びを通して育まれた資質・能力が小学校でどのように発揮されているかをアドバイザーが価値付けたことで小学校への円滑な接続の理解につながった。
 - ・ 幼保小で事前研修や振り返りをもちたいが、それぞれの日程を確保することが難しいため、年度初めに調整をしたい。また、アドバイザーを交えての研修会に多くの幼保小の教職員が参加することにより幼小接続の理解が深まると考える。
 - ・ 授業参観や事例を持ち寄った研修などを通して相互理解を深め、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」や学びの連続性を意識した架け橋プログラムを考えていく必要がある。
 - ・ 子供たちの姿を接続カリキュラムの作成につなげていけるように、育ちの価値付けを職員同士でしていけるようにより研修を高めていく。

(2) 幼保（5歳児）の横のつながりや幼保小の縦のつながり（交流活動）

- 幼保の5歳児が共に小学校入学への期待をふくらめていった。
- 幼保の職員の振り返りから、具体的に子供の気付きや学びを知ることができた。また、子供同士が顔見知りになり小学校への不安感が軽減されたのではないかな。
- 小学校交流では、1年生が年長児のために工夫して交流内容を考え、相手を意識し思いやりの心を育む姿が見られた。
- 幼保小の教職員がそれぞれの学びや教育について共通点や違いを意識できた。
 - ・ 子供同士が自ら進んで関わり合えるような環境や活動を工夫していくことで、入学後の期待を共に育んでいけるのではないかな。

(3) 地域の自然等を活用した遊びを通した学びの充実

- 地域の自然環境を生かした活動や文化、伝統に触れる豊かな体験をし、「見たい」「なぜ」「調べたい」など、自ら心を動かし主体的に活動に取り組む姿が、小学校の学びの基礎につながるのではないかと考える。
- 子供の興味や関心の広がりをつかえ、小学校につながる“遊びの中の学び”について話し合い、それをもとにして環境構成や援助の工夫につなげることができた。
 - ・ 地域の自然環境を生かした保育活動の大切さを改めて感じることはできたからこそ、子供たちの遊び・活動を通した育ちや学びの価値付けを丁寧に捉えることが必要となる。また、保育の充実を図ると共に、接続カリキュラムの作成につなげた保育の質の向上をめざしていきたい。
 - ・ 幼児期の遊びや学びの価値や育ち、また、幼小の接続にどのようなつながりがあるのかなど、保護者への啓発を図っていくことで、子供だけでなく保護者の方の入学への不安も軽減できるのではないかな。そのためには、保護者の方への発信方法を工夫していきたい。

協議主題 2

指導計画の作成、保育の展開、
指導の過程の評価・改善について



静岡大学教育学部附属幼稚園

1 園の所在地・園児数

(1) 所在地 静岡市葵区大岩町1番10号

(2) 園児数及び職員構成

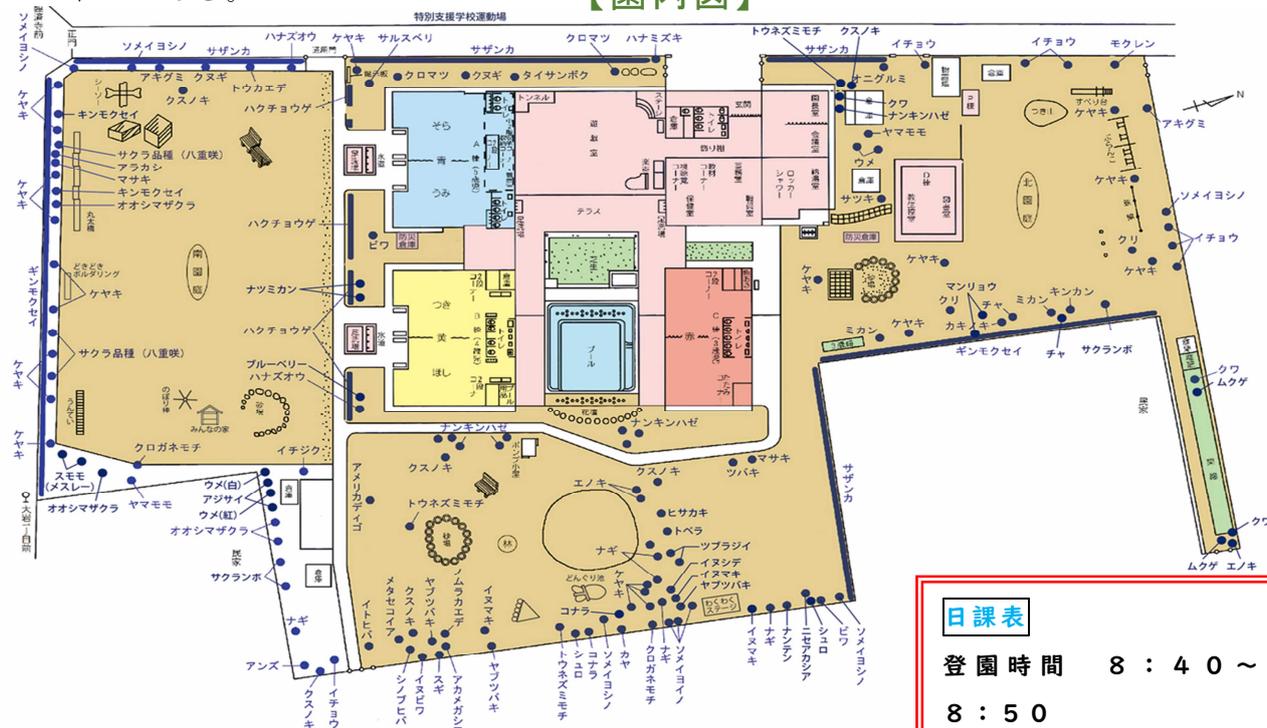
	3歳児	4歳児	5歳児	合計
学級数	1	2	2	5
園児数	24	27	28	79
職員数	2 担任1 補助1	3 担任2 補助1	3 担任2 補助1	11 園長1 教頭1 養教1

職員は小学校からの交流教諭3名、大学採用の幼稚園教諭2名の計5名がクラス担任をしている。園長、教頭は公立幼稚園の経験が長く、クラス担任は経験年数が短いという職員構成である。

(3) 本園及び地域の実態

本園は、静岡市の中心から北東に2kmのところであり、園の周りには緑ゆたかな公園や図書館、歴史に残る神社、仏閣が点在する地域である。また、静岡大学教育学部附属特別支援学校と同じ敷地内にあり園庭には林、築山など四季折々の木の実がなる木々がある。

【園内図】



日課表	
登園時間	8:40 ~
	8:50
降園時間	3歳児 3:40
	4歳児 3:30

(4) 本園の日課

本園は、学年によって降園時刻が異なる。これは、発達に応じた保育時間を設定しているためである。また、原則として水曜日は、年少、年中組の降園時間を午前11時30分、年長組を午後1時として、水曜日は研修日とし位置づけている。

2 研究の構想

< 協議主題 2 >

指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について

【協議の視点】

- ① 幼児の発達に即して一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開し、必要な体験を得られるように指導計画を作成するには、どのような工夫が必要か。
- ② 具体的なねらい及び内容を設定し、適切な環境を構成するに当たって、どのようなことを考慮する必要があるか。
- ③ 幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう、先生はどのような姿勢で援助をする必要があるか。
- ④ 幼児の実態に即して指導の過程についての評価を適切に行い、指導改善を行うためには、どのような工夫が必要か。

(1) 研究主題の受け止め

幼児期にふさわしい生活が展開されるために、適切な指導が計画的に行われることが必要とされている。この計画は、長期的、短期的な計画で発達の道筋を見通し教育的に価値のある環境を構成して具体的なねらいや内容を明確にしたあらかじめ考えた仮説である。その仮説を立証する為には、PLAN（計画）を立て、DO（実践）、CHECK（反省、考察）をして評価しACTION（改善）の好循環サイクルが必要である。このサイクルで指導計画を作成し適切な指導を行っていけば、幼児が主体的に豊かな生活を送り、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に近づくことができると捉えた。

(2) 研究の方法

ア 幼児理解を深める「協働型保育カンファレンス」

保育のスタートは、子ども一人一人をきちんと見ることである。「保育カンファレンス」を行い色々な意見を出し合って多くの情報を伝え合うことでより幼児理解を深めていく。「協働型保育カンファレンス」は安心してなんでも話せることを基盤としている。多面的な意見を出し合って幼児理解の質を高めるとともに同僚性の高まりや連携が密になることにつなげていく。幼児理解の質が高まることは、保育の質が高まることである。それは適切な援助を行うことであり豊かな保育につながることだと考える。

(ア) 年間5回の園内公開保育を実施し、事後研修では、全職員で子どもの姿を通して語り合う「協働型保育カンファレンス」を行う。

(イ) 年間3回の公開園内研修会を実施し、事後研修では、講師を招聘し、講師の助言や外部の教職員の意見等も参考にしながら、保育カンファレンスを行う。

イ 指導計画(長期的、短期的計画)の作成、実践、改善

常に子どもの成長を支えていくために教師として何をしたらよいか考え、見通しをもち好循環のPDCAサイクルを行うため、職員で協議する時間を設定する。

(ア) 週案・日案について

週日案については、週末に学年ごとに打合せの時間を設定し、幼児一人一人の発達の違いや遊びの捉え方を共通理解しながら、次週の計画を作成していく。

(イ) 月案について

月案については、学年運営会議の時間を設け、各担任が作成した月案の評価、改善を踏まえた次月の案の検討を全職員で行う。

(ウ) 年間計画、期の計画について

前年度末に、それまでの評価や子どもの育ちをもとに、次年度めざす子ども像を共通理解し、次年度の年間計画を立てていく。年度途中においても、長期的、総合的な視点で保育活動を見つめ直し、改善を図る時間を設けていく。

ウ 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進

幼稚園教育として、小学校の就学を見据えた保育を行い子どもたちの育ちがどうであったかを評価していくことが大切である。本園の95%の子どもたちが附属静岡小学校に入学するため、幼小の円滑な接続のためには同小学校との連携や協働が欠かせない。

(ア) 附属小学校との連絡会等の実施

附属小学校との研究会や幼小連絡会で話し合い、お互いの特徴やカリキュラムを共通理解していく中で、幼小の架け橋プログラムを考えていく。

(イ) 小学校教諭の交流人事

本園の職員3名は、小学校教諭でもあるため、その職歴を生かし、小学校以降の子どもの育ちや学びを見据えた保育改善を行う。

3 研究の実践

(1) 幼児理解を深める「協働型保育カンファレンス」

ア 園内研修における協働型保育カンファレンス

各クラス年1回ずつ、年間で5回、保育を公開し、その保育を全職員で見合う。他学級の保育は継続されるため、2つのグループを作り、前後半に分かれてグループごとに参観する。事後のカンファレンスもグループごとに行い、保育の様子や子どもの情報を出し合う。互いのグループで出た意見を共有する時間を設定し、違うグループの意見を聞くことで多面的に子どもを捉える。

実践事例①】 第1回園内協働型保育カンファレンス (R5.5.10)

《日程》

時間	内容	担当保育者	参観者	備考
9:00～ 10:00 (40分)	グループごとに参観 ①前半(20分) ②後半(20分)	保育	【研究主任】→保育者の観察 【前半グループ】 【後半グループ】3名	前半グループの方は、参観が終わったら次の方へ伝えてください。
研修	事後研修の流れ	内容・担当など		
5分 (13:15- 13:20)	進行説明 話し合い 各回20分	本日の研修についての説明【研究主任】 2グループに分かれて話し合う 多様な意見を認め合う。安心感を高める。多くの意見を言う		
5分	保育者の振り返り	今日の保育について振り返りを行う【担当保育者】		

《カンファレンスで出た意見》 ○肯定的意見 ▲課題となる意見

- 4歳児の実態について知ることができた。年齢による発達の姿の違いが理解でき発達の見通しをもつことができた。
- 友達に目が向く子もいるが、まだ一人遊びを楽しむ時期であることがわかった。
- 自分では気づかないことが多くあり参考になった。
- ▲ 情報交換だけの時間になっていた。方向性や意見の交換ができるとよい。
- ▲ 他者の発言から自分の思考の変化・深化につながるまでいかなかった。

イ 公開園内研修会における保育カンファレンス

地域に、附属幼稚園における子どもの学びや生活についての理解や幼児教育への理解を促すため、年3回公開園内研修会を実施しているが、その折にも保育カンファレンスを実施し公開する。

【実践事例②】令和5年度第1回公開園内研修会（R5.5.31）

《日程》 9:00 11:30 13:00 14:15 15:45

公開保育（4歳児）	降 園	昼 食	事後研修 （協働型保育カンファレンス）	講師による講話 三重大大学教授 富田昌平 氏
-----------	--------	--------	------------------------	---------------------------

《カンファレンスで出た意見》 ○肯定的意見 ▲課題となる意見

- 参加者が同じ場面で子どもたちの遊びの様子や環境を見合っただけの情報共有でき、子どもたちを多面的に捉えることができた。
- 様々な立場の先生方の見方や捉え方の違いを知ることができた。
- 担任1人だけではクラスの子どもの言葉を聞き逃してしまうこともあるが他の教師と連携して情報を共有していくことが大事であることがわかった。
- ▲ 参観者の感想も参考になったが感想だけでなく保育について深まる話があっても良かった。

(2) 指導計画(長期的、短期的計画)のPDCAサイクル

ア 週案又は日案の検討

クラス担任が週案又は日案を作成し、学年の教師で前週の反省評価をもとに検討

期のねらい	○様々な遊びや場所に興味をもち、その中で好きな遊びを見つける ○自分の気持ちを言葉や態度で伝えようとする	
週のねらい	○ 友達と同じようなイメージをもったり、思いを感じたりして楽しむ。 ○ 一緒に遊ぶ教師や友達に、自分の思いを言葉で伝えようとする。 ○ 身近な自然に親しみ、触れたり遊びに取り入れたりして楽しむ。	内 容 ・ 自分の好きなものになりきって友達と一緒に遊ぶ。 ・ 自分の思ったことや考えたことを言葉や身体で表しながら友達と一緒に遊ぶ。 ・ 様々な素材を使ってイメージしたものや見立てたものを作ろうとする。
遊びと生活	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じようなイメージをもって友達と関わって遊ぼうとする。 【いろいろなごっこ遊び（乗り物、お店屋さん、おうち、ブロック、プリゼス）】 ・ 自分の気持ちや思いを、言葉や態度で相手に表す。 * 実現したい思いを探り、手助けしたり、より楽しくなるアイデアを一緒に考えたりする。 * 遊びの中での言葉のやりとりをメモしたり、その子なりの表現を認めたりしていく。 	

・今週の表れを話し、来週のねらい、予想する遊びを共通理解する。
・3人で評価を行い改善する。
・具体的な援助まで共通理解する

【実践事例③】令和4年度 3歳児11月の日案検討

◎学年の教師同士で話し合うことにより、子ども一人一人の思いを理解し、日案に反映させていった。

《それまでの子どもの様子》

救急車やパトカーの緊急出動のテレビで救急車の隊員が怪我人を搬送していることを見た子が、園で「大丈夫ですか」「生きてますか」などテレビで見た真似をして遊んでいた。また、10月の避難訓練時に、園近くの消防署から消防士がきてくれて出動時の話を聞いたり消防車に乗ったりした。その後、救急隊ごっこ、乗り物ごっこ、ヒーローごっこなど3～4人のグループで毎日遊んでいた。3歳児なので個々の遊びを十分楽しむ時期であるが、友達の遊びに興味を示しごっこ遊びをする子もいる。

《子ども一人一人の理解に基づく日案の検討》

A男は言葉が不明瞭でいろいろな遊びに興味はあるが長続きしなかった。A男は友達のやっている救急隊員ごっこに興味を示しているが遊びを見ているだけで話をする事がなかった。



教師は、遊びに必要なもの、材料、環境を予想して準備をするとA男も友達が作っているものを真似するようになった。なりきって遊んでいる仲間に教師が関わることで遊びがさらに盛り上がり、子どもたちの会話は増えていった。A男は喋ることが少なかったが教師はA男が友達と一緒に楽しんでいると捉え、時々言葉を掛け見守っていた。教師がいることでA男は友達との遊びに興味をもった。この時期の子どもはごっこ遊びにおいて言葉が少なくても救急隊員やヒーローになりきって一緒に動くだけで楽しんでいる。本日のねらいを『同じ場にいる友達とごっこ遊びやなりきって遊ぶことを楽しむ。』とし、A男は友達と同じ場にいるだけだったが楽しさを味わっていると捉えた。



ヒーローになって喜んで遊ぶB男と教師の関わりを見ていた他の教師から、教師は仲間として遊んでいるが言葉が丁寧すぎて、ぎこちなさを感じるという話が出された。記録には、子どもたちがなりきる楽しさを味わっているが、教師自身が話し方にぎこちなさを感じるとまでは記録されていない。

一緒に保育する教師との話し合いで他の教師から

「もう少し子どもの目線の会話にしたら？」という話が出た。日案に細かい話の内容まで記入していなかった。この言葉を言うのと、子どもとの距離感が縮むのでは？こんな思いをしているのでは？という予想（仮説）が少なかったことがわかった。予想する遊びに教師の話し言葉まで書いておくと安心して子どもたちと向き合えるのではと考えた。早速B男の仲間として遊ぶ時に、B男との距離感を縮める言葉を考えて遊んだ。いくつか言葉を予想しておいたため遊

び方が今までと違い、B男との距離も近くなったと感じた。

A男に対しても成長や変化を記録してあるがどのように向かい合うかの予想も書いておくべきだったと反省した。そして、教師がその場で感じた楽しさは、子どもと共感し合いながら遊ぶことそのものだった。

子どもの思いにピッタリする言葉と教師の関わり方を探りながら計画を立て実践し記録、考察して改善することを繰り返すことが大切だと感じた。また、個々の発達も違うため一人一人に合った指導計画の必要性にも気づいた。そして、教師の役割は、子どもと一緒に共同作業を行う人的環境として、場面ごとに役割に変化をもたせながら子どもに寄り添い具体的な援助を常に考えていくことが必要だった。

イ 月案の検討

クラス担任が月案を作成し、全職員で前月の反省評価をもとに検討

- ・発達にあっているか？
- ・子どもの表れについて（幼児理解）予想される遊びや遊びのつながりを再度見直し、改善する点を話し合う。

令和4年度 5歳児青組【そら組・うみ組】 月の指導計画 作成日：2022/09/22	
10月	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分なりの目あてをもって、意欲的に遊びに取り組む中で、自分の力を発揮する楽しさを味わう。 ○ 友達と思いや考えを出し合いながら力を合わせ、自分たちで生活や遊びを進めていく楽しさを味わう。 ○ 季節の移り変わりに関心をもち、自然現象や自然物を楽しむ。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作戦を立てたり遊び方を考えたりして、友達と協力し、やり遂げた達成感を味わう。 ・ 友達と気持ちを合わせることに楽しさや、競い合うことの面白さや悔しさを感じる。 【リレー・うんどうかいの種目・行進・ルールのある遊び】 * 競技の勝敗の嬉しさや悔しさ、行進で動きがそろったときに感じる満足感を大切に、次はどうしたらよいか話し合ったり試したりすることを通して、仲間とのつながりを深めていけるようにする。一勝つための作戦を、みんなで考えた。そして振り返りをするので、作戦をたてる、ルールを守ることの良さを感じることができた。
内容 *環境構成と教師の援助 →振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近な自然物から季節の変化や美しさを感じたり遊びに取り入れようとしたりする。 【トンボ等の虫・木の葉・紅葉・雲・空・風・虫の音・散歩・サツマイモの収穫】 * 子どもの気づきを大切に受け止め、クラス全体で話題にして季節の移り変わりを感ぜられるようにする。 → 秋の自然に気が付き、自然物そのものの様子をよく見る姿がみられた。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分なりの目あてに向かって繰り返し挑戦し最後までやり遂げようとする。 【雲梯・のぼり棒・なわとび・フワフワ一本道下駄・鉄棒】 * それぞれの頑張りをクラスや学年全体に伝え、互いに認め合うことで、友達の良さに気づき、刺激を受けられるようにする。頑張りを視覚的に表せるもの（ボード、表等）を用意する。 → 記録の写真を視覚的に表すことは自分の頑張りが分かり、めあてにむけよりよい記録へ挑戦しようとする意欲につながっていった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経験したものや自分の思いを表現することを楽しむ。 【・とんぼづくり・うんどうかいの絵・ごっこ遊びに必要なアイテムづくり】 * 話をしながら経験したことを思い出し表現しやすくする。 → とんぼを描まえた子は色や模様などをよく見ていた。うんどうかいの絵は人を横向きに描いたり、関節の動きを意識したりするのは難しかったが、写真や実物を見ながら描いていた。子どもにイメージを聞きながら、素材は一緒に考えて選んでいた。

令和4年度 5歳児青組【そら組・うみ組】 月の指導計画 作成日：2022/09/22	
10月	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分なりの目あてをもって、意欲的に遊びに取り組む中で、自分の力を発揮する楽しさを味わう。 ○ 友達と思いや考えを出し合いながら力を合わせ、自分たちで生活や遊びを進めていく楽しさを味わう。 ○ 季節の移り変わりに関心をもち、自然現象や自然物を楽しむ。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作戦を立てたり遊び方を考えたりして、友達と協力し、やり遂げた達成感を味わう。 ・ 友達と気持ちを合わせることに楽しさや、競い合うことの面白さや悔しさを感じる。 【リレー・うんどうかいの種目・行進・ルールのある遊び】 * 競技の勝敗の嬉しさや悔しさ、行進で動きがそろったときに感じる満足感を大切に、次はどうしたらよいか話し合ったり試したりすることを通して、仲間とのつながりを深めていけるようにする。一勝つための作戦を、みんなで考えた。そして振り返りをするので、作戦をたてる、ルールを守ることの良さを感じることができた。
内容 *環境構成と教師の援助 →振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近な自然物から季節の変化や美しさを感じたり遊びに取り入れようとしたりする。 【トンボ等の虫・木の葉・紅葉・雲・空・風・虫の音・散歩・サツマイモの収穫】 * 子どもの気づきを大切に受け止め、クラス全体で話題にして季節の移り変わりを感ぜられるようにする。 → 秋の自然に気が付き、自然物そのものの様子をよく見る姿がみられた。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分なりの目あてに向かって繰り返し挑戦し最後までやり遂げようとする。 【雲梯・のぼり棒・なわとび・フワフワ一本道下駄・鉄棒】 * それぞれの頑張りをクラスや学年全体に伝え、互いに認め合うことで、友達の良さに気づき、刺激を受けられるようにする。頑張りを視覚的に表せるもの（ボード、表等）を用意する。 → 記録の写真を視覚的に表すことは自分の頑張りが分かり、めあてにむけよりよい記録へ挑戦しようとする意欲につながっていった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経験したものや自分の思いを表現することを楽しむ。 【・とんぼづくり・うんどうかいの絵・ごっこ遊びに必要なアイテムづくり】 * 話をしながら経験したことを思い出し表現しやすくする。おとんぼは色や模様をよく見ていた。うんどうかいの絵は人を横向きに描いたり、関節の動きを意識したりするのは難しかったが、写真や実物を見ながら描いていた。子どもにイメージを聞きながら、素材は一緒に考えて選んでいた。

ウ 年間計画、期の計画の検討

年度末に、年間の反省をもとに次年度の計画を立てるが、行事と活動のつながりを意識するなど、長期的、総合的な視点で、保育計画を作成していく。

また、期毎にも同じような視点で反省、見直しを行い、行事と活動のつながりを意識した保育活動になっているか振り返り、改善を図る時間を設定した。

【実践事例④】令和4年 運動会の計画検討

◎運動会を年間計画の中で総合的な活動と位置づけ、体を動かす遊びや作品展などの他の行事との関連を考慮して長期的な視点で計画を立てた。

《年間計画の中での運動会の位置づけ》

運動会は、1年間を見通し4月当初から運動遊びがどのように展開されていくかを予想し、経験させたい活動と子どもたちの興味、関心と絡ませ主体的に取り組めるように計画した。

例年10月中旬頃、子どもたちの体力面や心情、意欲（自分たちの目標に向けて思いの実現ができるようになる時期）という面から考え、運動会を位置づけていた。一昨年度からコロナ禍ということもあり運動会の取り組み方全体を見直した。運動会は、保護者の参加ある無しが大きく影響してくる。そこで昨年度も発達が違う子どもたちが同じ場所で参加することが望ましいかどうかという点で見直してみた。そして、子どもたちが無理なく参加することを優先し3学年別々の日に学年別運動会にすることにした。5歳児の姿を見て憧れる3歳児、4歳児が「自分たちもやってみたい」「真似してみたい」という気持ちがどの機会にもてるかを考え計画を立てた。また、3歳児、4歳児が自然に5歳児の様子が見られるように意識した。

《運動会に至るまでの計画》

運動会の検討は、夏休み前に全職員で確認する機会をもった。運動会に向かう過程でも子どもたちの成長が著しい時期であると考え、運動会をやったという達成感が味わえる活動を考えることを大切に、運動面だけではなく総合的に考えた。

昨年も夏休み後、暑い日が続き戸外遊びが長い時間できないことがあった。そんな時でも子どもたちからリレーや運動会の話題が聞かれ始めたので「今年の運動会は10月7日です」と伝えた。子どもたちからは「やりたい」「今年はどうしたい」など意見が出てきたため1学期の遊びから継続しているものと、新たにやってみてみたいものを整理して運動会の遊びが始まった。

5歳児は、昨年の経験から運動会の種目にこだわりをもち「こんな競技をした」とクラスで話し合いを行った。リレーでは相手に勝ちたいという思いが強く、クラス毎秘密の特訓や作戦会議をしていた。そして、勝つ方法にこだわり色々なやり方を考え話し合っては試した。運動会当日も負けたクラスは悔しい思いをしたが、納得したリレーになったようである。



やりたい子が集まりルールを決めて始め、徐々に子どもたちが増えていった。友達同士伝えあ



しかし、障害物競走では、障害物をどうするかで意見がまとまらず、遊び込むことができないまま当日を迎えた。そのため競技では力を出し切ることができなかった。障害物走をやりたいという子どもたちの気持ちを尊重し、子どもたちの思いを優先しつつも、予想される困難さに子どもが気付くような仕掛けや声かけが必要であった。

計画を立てる段階では、子どもの実態や発達段階を考慮するが、日々の実践の中でも、子どもの表れに応じて計画の検討や修正が必要であったと感じた。



- 障害物の数が多い
- 同じ障害物でない
- ルールが多い



1学期から親しんで遊んだものを親子競技や種目に取り入れたため運動会当日の学年の子どもたちも自信を持って参加していた



3歳児は、好きな動物になりきって競争し楽しさを味わっ



運動会に必要なものを考えてみると、プログラム、応援グッズ、障害物走に必要な障害物などの制作物に関したのものや、運動会の進め方やルール作りや当日の役割など子どもたちから多くの意見が出てきた。運動会当日だけではなく、色々な経験ができる活動として年間の位置づけからも遊びと遊びのつながりを大切にしていた。

このように運動会は、年間の指導計画の中で総合的な活動として位置づいている。作品展や他の園行事も見通しをもち遊びのつながりを工夫していくことで、時間的なゆとりや子どもの思いのつながりもあり豊かな活動になってきている。

《運動会の実施について保護者の理解を促すために》

運動会を学年別に行ったことでゆったり見ることや応援することができたと保護者にも好評だった。確かに他学年一緒に行くことは見合える良さはあるが、各学年別で行うことも、子どもたちのペースで行える良さがあつたとアンケートに書かれていた。いつものやり方ではなく子どもを中心に置くことが大事であることを再確認し見直す機会になった。このようにその時代、時期に合う形を考えていくことが大切であると痛感した。

運動会当日に時間的に無理な種目は、別の日に保護者に来ていただき見せたり遊んだりする機会を設けた。

保護者に状況を理解してもらふことや、子どもたちの達成感も味わうことができた。

最初に年中の子どもたちは、実習生に見てもらい、見せ方を考えま



11月にショーを見てもらいたいと保護者に来てもらった。

(3) 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進

ア 附属小学校との連携・協働

附属小学校との連絡会や研究会時に子どもたちの情報交換を行い、幼稚園のアプローチプログラムと小学校のスタートプログラムを理解し共有できるように努めている。幼稚園の教師が小学校に出向き実際に入学した子どもたちの表れを見ながら幼稚園教育から小学校教育のつながりの様子を確認し合うことができた。就学を意識したプログラムや指導計画を常に位置づける必要性を痛感した。

令和5年度 附属小学校との連携・協働活動
 6月7日 公開授業に幼稚園教諭参加 10月13日小学校研究会に幼稚園教諭参加
 3月6日 5歳児1年生との交流会 午後幼小連絡会
 この他に附属学校園の校長会、教頭会、教務主任会、生徒指導主事会、養護教諭会を会毎に、年4回から11回行っている。

【実践事例⑤】令和4年 アプローチプログラム			
令和4年度 アプローチカリキュラム 静岡大学教育学部附属幼稚園			教育目標 主体的な生活を創造する子
期(時期)	I期~Ⅶ期(入園から5歳児1学期)	Ⅷ期(5歳児9月~12月)	Ⅷ期(5歳児1月~3月)
期の特徴	自分の力で遊びながら学んでいく。 自分でコントロールする力を身に付ける。	共通の目的をもち、友達と一緒に活動する楽しさを味わう。	友達のよさに気付き、互いを生かしながら園生
幼稚園教育において育みたい資質・能力	知識及び技能の基礎	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。 身近な道具や用具の使い方が分かる。 身の回りのことを自分でする。 身近な自然に触れ、その特徴や不思議さなどに関心をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 運動会への取り組みを通して、体の動かし方を意識したり、全力を出し切ったりしようとする。① 様々な道具を使って、思いを実現するために試行錯誤する。 園生活の流れが分かり、自分たちの生活を自分たちで進めていく。① 夢中になって遊ぶ中で、身近な自然の変化や特徴に気付く。⑦ 基本的な生活習慣が身に付き、進んでやろうとする。②
	思考力・判断力・表現力等の基礎	<ul style="list-style-type: none"> 思いを言葉にして表す。 身近にある様々な素材に親しむ。 感じたことや考えたことを自由に表現しようとする。 思いをもって試行錯誤することを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな素材を組み合わせて、工夫したりしてイメージをしたものを形にする楽しさを味わう。⑥⑩ 行事への取り組みや遊びの中で友達と目的を共有し、見通しをもって進めようとする。③ 栽培物の収穫や身近な自然を拾い集めたりすることを通して、形や大きさの違いに気付いたり、数や量を意識したりする。⑦⑧
	学びの態度	<ul style="list-style-type: none"> 好きな遊びや居心地のよい場を見つけて、安心して過ごす。 友達と一緒に遊ぶことを楽しむ。 身の回りの物を大切にしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の目当てに向かって最後までやり遂げようと挑戦する。② 友達と目的を共有しながら、力を発揮して取り組む。② 相手の思いやよさを認め、言葉で伝え合いながら遊びを進めていく。②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩

イ 小学校教諭の人事交流

5歳児担任の一人は小学校から人事交流できている教諭である。小学校勤務の経験を生かし、小学校以降の学習を見通して、保育のカリキュラムを作成し、実践している。(幼稚園での育ちが小学校で仲間づくりや学びの基礎へつながりっていく)

4 成果と課題

(1) 成果

ア 幼児理解は、保育の始まりであり指導計画作成には不可欠なものだった。子どもを多面的に捉え情報共有ができ連携した保育に繋がってきている。また、カンファ

レンズの中で予想、予測を多くもつことで援助の幅が広がった。

イ 子どもの姿を捉え、願いをもちP D C Aサイクルを週、月、学期、年間を行っていくと発達の姿に即した具体的な援助ができるようになった。

ウ 月、期ごとに指導計画の改善をしっかりと明記することで、次年度の教育課程の作成まで行うことができ時間的にもゆとりができた。

エ 指導計画を作成することで、先を見通すことや発達に必要な経験を吟味することができて豊かな体験につながった。

オ 集団の中での協同性の育ちが小学校で学び合いの中で欠かせないことであることも理解し合えた。

(2) 課題

ア 日々ドキュメンテーションのクラスだよりや明日の準備などに追われ日案の反省、考察、翌日の指導計画作成の時間の確保が難しい。今後、週日案の作成時間をしっかり確保していく。

イ 「子どもがやりたいと言ったから」と子どもの思いを大切にして経験させたいことが流されてしまいがちである。教師の意図をバランスよく絡ませ活動が生まれやすい環境を作っていくようにする。

ウ 園内環境だけではなく地域の環境も取り入れ豊かな体験に繋げていく。

エ 幼小連携については、細かい教育課程のすり合わせができていない。今後子どもの姿を見ながら検討していきたい。